

編集 報道委員会委員長 瀧元 智恵	第 206 号 2026 年 3 月	<b>JAUW SAPPORO</b>	発行 (一社) 大学女性協会 札幌支部 支部長 朝日 幸世
-------------------------	--------------------------	---------------------	--

## JAUW 全国セミナー2025 【ウェルビーイングと環境 ～くらしの視点から～】 札幌支部発表 『北海道水産業の課題』

### 全国セミナーで発表して

2025年10月18・19日にJAUW全国セミナーが開催され、『北海道水産業の課題』について札幌支部代表として発表しました。何とか無事に発表を終えることができご協力いただいた皆様方には感謝の気持ちでいっぱいです。

6月に企画委員から依頼があった際には、4ヶ月という短期間で全くの専門外の課題に戸惑いましたが、鈴木企画委員長からの丁寧なメールを何度も読み返し、挑戦してみることにしました。

アンケートの収集では札幌支部会員の皆様の尽力であつという間に沢山の回答が集まり感服いたしました。

北海道水産業の現状は、知れば知るほど難題が多岐にわたり危機的状況であり、今後も美味しい魚介類を食していくためには消費者の私たちも課題に真剣に向き合う必要があると感じました。  
(瀧元智恵)



### 素晴らしい協力態勢 —全国セミナーへの取り組み—

6月に本部の鈴木企画委員長と今野理事からメールをいただいたときは「どうしたものか…?」と言っていた私達。けれども、瀧元副支部長が、「東京まで行きます!」と言って下さり話がどんどん進展、札幌支部会員の実力が存分に発揮されることとなりました。

アンケートを実施、上がってきた課題を深堀り、北海道庁までお話を伺いに行く、

何度も ZOOM で準備会をして、発表の練習も行い、セミナー当日は、東京在住の野寄副支部長も会場でセミナーに出席…素晴らしい協力態勢でした。

私は、以前は美味しかった利尻のウニが、(ミョウバンではなく塩水で処理しているので、茶こしですくって、氷水の中でプルプルッとふるって塩分を軽く抜きます。)ちっとも食べられなくなった、という「食いの恨み」的な動機で、何とかしなくてはならないと思い、話の聞き取りもしました。(紙を渡してもパパッと書いてくれない)

セミナーには ZOOM で参加しました。札幌支部の発表はとても良くて嬉しかった♡

私の住んでいるところは北海道のお米どころ(ゆめぴりか、ほしのゆめ、きらら、ふっくらんこ、など)なので、新潟支部のお米の話にも興味があり、翌日の分科会にも参加しました。

おかげさまで勉強になりました。皆様に感謝です。(朝日幸世)

### 全国セミナーの感想

2025年度JAUWセミナーに、札幌支部へ登壇の宿題が割り当てられ、しかも漁業分野での現状を示すというテーマに、当初、私は、短時間でその準備は無理、と考えていました。皆、消費者あるいは道民として水産資源や漁業に関心はありますが、専門家ではないのですから。ですが、いざ、引き受けることが決まると、支部会員の熱意と行動力、集中力、団結力、調整力は想像を超えるもので、その結果は、セミナー当日の、中身の濃い発表として結実していました。道外在住支部会員である私にできることは、時間と場所を問わずにできるネット上での下作業手伝いと、セミナー当日の旗振り応援だけ。当日、セミナーの場に居合わせて、前のめりになって発表を聞いてくださる聴衆の皆さま、拍手喝さい、質問の数々という熱気に接し、本当に札幌支部を誇りに思いました。綿密な準備と歯切れ良い発表をされた瀧元会員と支部の皆様にお礼申し上げます!  
(野寄由利)

## 第1回自然・文化・歴史を訪ねる会『創成川散策』

本来 7 月 27 日の予定が、酷暑の予報で中止となり、結局 11 月 7 日に変更され実施された。

北広島の朝、東方は赤く染まり美しかったが、天気予報は昼前に雨の予報。伸び伸びになっていたし、朝空のきれいさから、押谷さんの天候を気遣う電話に“行きます”と返答した。4人全員が集合し、集合地へ行きだした途端、何と憎らしい！予報通りにみぞれ交じりの激しい雨に。その後も一向に雨脚は衰えず降り続いたので、創成川公園で唯一屋根のある創成川開拓広場の南1条交番跡休憩所で、缶詰状態でガイドさんの話を伺うことになってしまった。札幌へは用向きの場所への往復だけで、札幌も創成川も無知といった方がいい私にとって、この時の創成川を巡る話は驚愕ともいえる内容だったので、むしろ有難い時を頂いた、と思う。以下、私に残った感想から。

北海道開拓、札幌開拓は“大友堀”から始まる、と言っても過言ではないようだ。大友堀は江戸末期、函館藩直轄の農場への用排水路として堀削された、大友亀太郎による南3条から北8条までの約4kmの水路で、物資輸送の舟運ルートとして重要な役割を果たしていた。

明治2年、判官、島義勇がこの大友堀を東西の基準として札幌の街づくりを開始。大友堀に丸太を置き、板を敷いただけの創成橋の原型ともいえる状態から、その2年後には銭函から札幌への船を入れるための拡幅時に、手すり付きの長さ 7.8mの木橋がかけられ、時の判官、岩村通俊がこれを“創成橋”と名付ける。更にその3年後には大友堀も“創成川”と改名されたという。

明治 13 年には北1条西1丁目に豊平館(後、現在地に移転)、南1条西1丁目に南1条交番が建設された。人口も一万人を超え、創成川の川縁では夏祭りや歳末市、サーカス小屋の催し等賑わったという。

明治 43 年には、東京日本橋と同時期に、高欄には美しい擬宝珠がついたモダンな石造アーチ橋にかけかえられ、又南1条交番は赤レンガ造り(後、開拓の村に移転)になった。

大正期には創成橋を通過する路面電車が開通(昭和 48 年廃止)した。

昭和 46 年には創成川アンダーパスが完成(今は閉鎖)、翌年には札幌オリンピックが開催され、人口も 100 万人を突破。

そして令和の今は何と人口 196 万人超えで全国 5 番目の大都市となっている！

アイヌ語のサト(乾く)、ポロ(大きい)、ベツ(川)が由来とも言われる広大な乾いた大地だった札幌の、僅か百数十年間の激しい変容を、この創成川周辺から感じ取られて感無量の思いであった。そしてその札幌開拓の基となるのが、計らずもこの集合地、開拓の広場だったのだ。さもありなん、この広場には大友亀太郎像、北海道里程原標、創成橋親柱、札幌市建設の地碑などがあり、ここから開拓がはじまったことを伝える特別な場所だった。

今はもう冬の入り口で寂しい景色だが、春には 32 品種 200 本のライラック、夏には 25 種のヘメロカリス、秋には川縁を彩る萩等をはじめとした美しい創成川公園(南 4 条から北 2 条間)がみられるので、是非その頃また、とのお誘い。無論のこと、花々に囲まれて、古に想いを馳せ“散策”しようと決めた。

天気のせいで、早めにガイドさんと別れ、近くの丸美珈琲店へ行き、めったにできないたっぷりのダベリング時間を過ごし、それからお待ちかねのイタリア料理店「アゴーラ」でおいしいコース料理に舌鼓をうった。天気には恵まれなかったけれど、結果として貴重な経験ができ、おなかも心も満たされた日だった。

(加藤好江 記)



## 第2回自然・文化・歴史を訪ねる会

### 『丸加高原そらぷちキッズキャンプ訪問』

素晴らしい秋晴れに恵まれた10月5日(日)、総勢7名(会員6名+支部長のお孫さん)で、滝川郊外丸加高原の「そらぷちキッズキャンプ」を訪ねました。20年ほど前に小児科医で俳人としても著名な細谷亮太先生が、難病の病児とその家族のために設立した医療ケア付きのキャンプ場です。普段は立ち入り禁止ですが、年に2回だけ一般公開されます。滝川にお住まいの朝日支部長のお計らいで訪問が実現しました。キャンプ場では細谷先生が出迎えて下さいました。支部からささやかな寄付を贈呈、また僭越ながら俳句同好会の合同句集をお持ちしましたところ、先生から最新刊の『細谷唳々集』を頂戴し大層恐縮しました(先生のあたたかなお人柄が偲ばれる素敵な句集です)

そらぷちでは、年間を通し介護の難易度等に対応した4種類のキャンプを行うほか、近年はスノーギフト(雪の降らない地域の病院等へキャンプ場の雪を冷凍空輸で贈る)の活動も始めたとのことです。活動の全てが寄付とボランティアの無償労働で支えられています。

先生のご案内で事務棟に続く宿泊棟・食堂、風呂・保健室などを見学、どこも病児と家族へのきめ細かい配慮があふれていました。印象に残ったのは広々とした開口部と大きな窓。狭い病室での長期の闘病生活から解放され、束の間であっても心身の潤いを取り戻すためのゆったりとした空間が用意されていました。その後、一時間ほど先生と一緒にキャンプ場を回りました。ボランティアの若者たちの手で綺麗に整備された草原の小径を抜け、車椅子でも渡れる吊り橋を渡って「森のツリーハウス」へ。自生する4本の大木に支えられたツリーハウスは、魔女の帽子のような屋根がメルヘンチックで童話の国に迷い込んだよう。森の中には障害を持つ子ども達も安心して遊べる遊具や楽しい仕掛けが多数用意されていました。キャンプ場には馬小屋もあり、キャンプのある時は馬との触れ合いや乗馬体験もあるそうです。

食堂に戻り絶品の特注サンドイッチを頂いた後は、見晴らしの丘から望む暑寒別岳に感動し、森の中のティータイムは見事に賑やかな女子会となりました。

今回の訪問は、病児とその家族の苦しみに寄り添い伴走する活動に敬意を表するとともに、童心に戻って楽しんだひと時でもあり、楽しく充実した一日となりました。支部長、皆様ありがとうございました。(出口好子 記)



## 第1回例会 豊平館歴史連続講座 「教師たちと女学校」

2026年1月18日（日曜日）18時から豊平館で歴史連続講座が行われました。JAUW札幌支部からは朝日支部長、瀧元会員、出口会員、堀内会員と押谷の5名で参加しました。

昨年に引き続き講師は北海道開拓の村学芸員の西田結香さん。明治から大正にかけて開校した女学校の教師や女子教育の発展についてのお話でした。

1872年（明治5年）4月文部省が正院（明治4年から明治10年まで存在した最高意思決定機関）へ提出した「小学教師教導場設立の伺い」の中で、従来の教育の欠点を挙げた「五弊」の紹介があり、とてもインパクトのある文言でした。

その内容は以下の通りです。（原文のまま）

- 一．教育法が不備である。子供が8～9歳または12～13歳になっても教育が義務化されておらず、親は子に教育を受けさせる意識がない。
- 二．教育のない者は、物の道理がわからず、身を持ち崩す者が多い。
- 三．庶民が学ぶ場は寺子屋で、師匠は狭い知識・教養しかない無頼者である。
- 四．教える規則が無く、多くの子弟を集めて、朝から晩まで声を出し、騒々しくしているだけである。
- 五．稀に学校が設置されていても、従来の風習を踏襲し「四書五経」を教えるか、無益なものを暗記させるだけ。

というもので、これを改善すべく教員を養成し、各地域に派遣することが急務との訴えがなされたのでした。しかもこの伺いの提出後わずか4か月で「東京師範学校」が開校するという、まさに驚異的なスピードで実現され、明治政府がいかに子どもの教育に重きを置いていたかを伺い知ることができました。

その2年後の1874年（明治7年）には「女子師範学校設立について」が太政官（明治初期の政府中枢機関）へ提出され、これも翌明治8年には「東京女子師範学校」が開校されており、この時代にありながら女子教育も男子同様に速やかに実行されていたことに驚きました。海外を視察した官僚たちによる well educated な女性の有り様に、わが国も早く近づかなければならないという焦り、女子に教育の必要はなしという長い因習を打ち破る勢いを強く感じる事が出来ました。ここに正規の女子教育が始まったということは、明治という特殊な時代の大きな産物の一つであったという思いを新たにしました。一方でご講話の最後に昨今の女子高や女子大学の減少、共学化についてのご報告もありました。多感な年齢を女子高で過ごした経験のある私にとっては、女子高ならではの楽しさや学びを大切に継続したいという思いもありますが、狭き門を勝ち抜いた先人たちが始めた女子教育の場が、今や生き残りをかけた時代に入ったことも強く認識できる一夜となりました。

（押谷君子 記）



俳句同好会二〇二五年度 自選三句

陽美保子

初冬の古事記ふるごとぎの山河かな

人の世に笛や太鼓や木の芽張る

こぼろぎや雲一片に地のかげり

押谷君予

春めきて林わづかに広がりぬ

土くれを押しのかけてまづクロッカス

つま先を少し濡らして若葉雨

川岸雅子

母子像の背に日の当る暮春かな

息災をほめあつてゐる薔薇匂ふ

雲一つ山の向かうや日記買ふ

下山陽子

熱帯夜着信音の「ボレロ」鳴り

放課後の弓道場や蟬時雨

海沿ひを走るジープや夏の果

鈴木真理

五冊入りノートの五色鳥の恋

花冷えの峡を特急列車かな

前菜の皿の冷たきりらの花

高橋房子

雨粒が雨脚となり山法師

結葉や約束固くして別る

ひとつ知り幾つ忘るる千日草

出口好子

のど奥に残るのど飴月おぼろ

初夏のよく乳を飲む赤子かな

一位の実国史辞典は十五巻

松原一枝

山法師月無き夜に浮かびけり

水色の日傘よ今朝の空に溶け

元旦の珈琲の香の立ちにけり



大きな時空の中で

陽美保子

虫の夜の星空に浮く地球かな 大峯あきら

秋の夜、虫の声に耳を澄ませる一人の時間はしずかで幸せなひとときです。そして、空を見上げると満天の星。ああ、自分は今ここに生きているんだなあと思った時、この地球も星空の中の星のひとつなのだという不思議な感覚が湧いてきます。広大な宇宙の中、たまたま地球という星に生まれ、たまたま今を生きている虫の声を聞いている。永遠の中の一瞬がどんなにいとおしく思われたことでしょう。

大峯あきらは自句自解で「星空を仰いでいた少年の日の不思議な眩暈が、年を経てまた私を襲ったのである。私はいったいどこにいるのか」と述べています。この最後の問いは哲学的で、「私はどこから来て、どこへ行くのか」という永遠のテーマとも通じます。このような感懐をたった十七文字で言い表せるとは、俳句とはつくづくすごい文学だと思えます。

